

論文題目：中国人日本語学習者による間接発話行為の理解

氏 名：李璐

## 論文内容の要約

間接発話行為とは、発話で用いられる文が現わす字義通りの発語内行為と話し手がその発話で意図する発語内行為が一致しない発話行為、すなわち、他の発話行為を使って間接的に伝える発話行為のことである（清水 2009）。たとえば、映画を見に行こうという誘いに対して、「試験勉強をしなくちゃいけないんだ。」と返事する場合、字義通りでは話し手の状態についての陳述に過ぎないが、通常、相手の誘いに対する断りとして解釈される。このように、陳述（形）という発話行為を使って、間接的に断り（働き）という発話行為を遂行することを間接発話行為と呼ぶ。本論文は、中国人日本語学習者の間接発話行為の理解について実証的な手法で検討した。本論文は8つの章からなる。

序章では、研究対象、研究対象の位置づけ、研究の目的、本論文の構成について記述した。

第2章において、前半は、理論的先行研究を概観した。具体的には、発話行為論、間接発話行為の定義と分類、協調の原理、関連性理論について論じた。後半は、間接発話行為の理解に関する実証的先行研究をまとめた。その際、まず、「検討対象となる発話行為のタイプ」「間接発話行為の理解効率性を表す指標：正確さと速さ」「間接発話行為の理解を測定するための課題提示方法」という3つの角度から間接発話行為の理解に関する研究方法をまとめた。また、「間接発話行為の慣習性」「学習者の外国語習熟度」「学習者の文化・母語背景」「学習者の外国語学習環境」「学習者の認知能力」などの背景要因が、間接発話行為の理解に影響を与えるかを検討した先行研究を整理した。さらに、学習者の間接発話行為の理解過程を検討した研究についても言及した。章の末尾において、先行研究の問題点を指摘し、本研究の課題を明らかにした。

第3章では、慣習・非慣習性および日本語の習熟度が間接発話行為の理解の正確さに

いかに影響するかをテスト調査で検討した。まず、中国の大学で日本語を専攻する中国語話者の学生 47 名に対して、慣習・非慣習的な間接発話行為の理解テストを実施した。また、クローズテストで日本語の習熟度を測定し、下位・中位・上位の 3 群に分けた。分析の結果、(1)「使用の慣習 (conventions of usage)」および「言語の慣習 (conventions of language)」からなる間接発話行為 (Morgan 1978) の理解が、非慣習的な間接発話行為よりも正答率が高かった。(2) 日本語習熟度が学習者の間接発話行為の理解を促進した。ただし、慣習・非慣習的な間接発話行為の理解には、日本語習熟度が異なるパターンで影響しており、(3) 慣習的な間接発話行為は、中位群レベルまでに理解ができるようになったが、(4) 非慣習的な間接発話行為は、日本語能力の向上に伴って、下位群から上位群へと徐々に理解が進むことが分かった。慣習・非慣習的な間接発話行為の理解には、日本語習熟度が異なるパターンで影響したという結果は、日本語教育現場での慣習・非慣習的な間接発話行為の理解についての指導に有益な示唆を与えるだろう。

第 4 章では、中国人日本語学習者 30 名に対して、間接断り、慣習的な間接意見、非慣習的な間接意見からなる 12 項目の間接発話理解課題の理解過程に関する口頭報告をインタビュー法で収集した。また、この 30 名を日本語のクローズテストで上位・下位の両群に分けた。その後、上位・下位群の学習者は、間接断り、慣習的な間接意見、非慣習的な間接意見を理解する際に、それぞれどのような文脈情報を理解の手がかりとして使うのか、何が困難点となるのかを計量的に検討した。その結果、(1) 学習者の口頭報告から、「論理的推論」「言語知識の慣習性」「パラ言語」「話者の意図」「隣接ペアの規則」「キーワード推論」という 6 種類の理解ストラテジーが認定された。(2) 「聴解力の欠陥」は、学習者が間接発話行為を理解する際に直面する最も大きな困難点である。(3) 間接断りの理解について、上位群の学習者は下位群より「論理的推論」を多用して正確に間接発話行為を理解しているが、下位群は「話者の意図」「隣接ペアの規則」の使用がより多かった。また、誤った項目のなかで、下位群の学習者は、ボトムアップ処理に過度に依存し、「隣接ペアの規則」「話者の意図」「パラ言語」などのストラテジーを活用できていないことがみられた。(4) 慣習的な間接意見の理解について、上位群の学習者は

下位群より「言語知識の慣習性」「パラ言語」を多く使用し、間接発話行為を正しく理解しているが、下位群は「言語知識の慣習性の不理解」で間接発話行為における話者の意図を誤解することが多かった。なお、上位群は「背景知識の干渉」からの影響を受けていた。(5) 非慣習的な間接意見の理解について、上位群の学習者は「論理的推論」を多用しているが、下位群は「キーワード推論」「パラ言語」を多く使用した。なお、上位群は「談話状況からの逸脱」による理解の誤りが多くみられた。これらの考察により、学習者の間接発話行為に対する認知過程の解明に近づくことができよう。

第5章では、第6章で使用した中国語版自閉症スペクトラム指数の開発過程について報告した。第5章は、臨床例から理論的に導かれた Baron-Cohen, Wheelwright, Skinner, Martin & Clubley (2001) の5つの下位尺度からなる「自閉症スペクトラム指数 (AQ)」モデルと因子分析から導かれた Lau, Gau, Chiu, Wu, Chou, Liu & Chou (2013) の5因子のAQモデルのいずれが適切であるかを、中国語翻訳版を作成して、355名の中国人健常者に実施し、確認的因子分析のモデル適合度指標で比較検討した。いずれのモデルも、本研究のデータと合致した適切な指標を示さなかった。そこで、Baron-Cohen, Wheelwright, Skinner, Martin & Clubley (2001) のオリジナルのAQ50 (50の質問項目) を基に、各下位尺度の確認的因子分析から貢献度の高い項目を5つずつ抽出して25の質問項目からなる簡易版のAQ25を作成した。AQ25は、データは正規分布に近く、またクロンバックの信頼性係数 ( $N=355$ ,  $\alpha=.78$ ) も高く、再検査法での信頼性係数 ( $N=15$ ,  $r=.85$ ) も高かった。Baron-Cohen, Wheelwright, Skinner, Martin & Clubley (2001) の英語版AQ50から、質問項目を半分にした中国語版AQ25は短い時間で効率よく健常者の自閉症スペクトラムを5つの下位尺度で測定することができ、現場の臨床的な使用に有効であろう。

第6章では、Taguchi (2008c) の日本語の間接発話理解課題の内容、提示方法を修正・改善した上で、中国人日本語学習者65名を対象に実施し、学習者の間接発話行為の理解の正確さ、および速さを実験で調べた。また、65名の学習者の聴解力、語彙アクセスの効率性 (正確さと速さ)、自閉傾向を実測し、この3つの背景要因が間接発話行為の理解の正確さおよび速さに影響を与えるかどうかを検討した。その結果、(1) 間接発話行為

の理解の速さについて、学習者の語彙アクセスの速さが有意に影響した。聴解力、語彙アクセスの正答率および自閉傾向は影響しなかった。一方、(2) 間接発話行為の理解の正確さについて、学習者の聴解力および語彙アクセスの正答率が有意に影響した。語彙アクセスの速さおよび自閉傾向からの影響はみられなかった。間接発話行為の理解の速さは処理過程、正確さは処理結果を示している。本研究では、間接発話理解処理の異なる2つの側面を反映し、それぞれ異なった要因が影響していることを示した。

第7章では、中国人日本語学習者98名を対象に、日本語で音声提示された「依頼」「誘い」「断り」の3種類の間接発話行為に対して、口頭で適切に対応できるかどうかを考察した。学習者が間接発話行為に対する理解から対応までのプロセスに関する、字義的意味が理解された後に、話し手の意図的意味が推論され、適切な対応に至るという理解・推論・対応の3つの段階を仮定した。そして、学習者の産出した対応を3つの段階で、「①意味不明」「②字義的表現による対応」「③語彙と文法の誤りを含む対応」「④適切な対応」の4つに分類した。その結果、約6割の学習者が間接発話行為に適切に対応できていた。全体として、3種類の間接発話行為ごとに、3つの段階の4つの対応において異なる反応のパターンがみられた。

第8章は、各章のまとめ、本論文の意義、本論文の限界と今後の課題についてまとめた。